



畜産技術センター ニュース

第3号 2006年9月27日

現地情報

普及指導部

こんなこともしています

和牛放牧による有害鳥獣対策・遊休農地対策の支援



伊勢原市日向地区ではサル・シカ・イノシシによる農作物への被害が深刻化し、これが営農意欲の低下や遊休農地の増加の要因にもなっています。雑草が茂ると周囲から視界がさえぎられ、野生動物が隣の耕作地へ容易に侵入するほか、住みかにもなります。また、生い茂った雑草を刈るのは重労働であり、除草剤を散布するにしても労働力が必要です。

今回、当センターの牛を利用し、「放牧」でそれらの悩みをどの程度解消できるか、実証試験を行なうことになりました。

実施にあたり、放牧地・管理者の選定・地主さんや地域住民の方への説明などは伊勢原市役所が担当し、牛の運搬は伊勢原市農協にお願いするなど、そのほかにも多くの関係機関の協力があって実現したものです。

当センターでは、全体の調整・放牧牛と電気牧柵の貸し出し・飼養管理面のアドバイス等を行いました。

今回の取り組みを通じて「放牧による農地の管理」への理解が深まる事を期待し、今後も本技術の普及に取り組んでまいります。

試験ほ場区の概要

- 面積：約50a、放牧期間：9月初～10月末（約2ヶ月間）
- 放牧牛：10歳と12歳の黒毛和種・繁殖めす、牧柵：電気牧柵
- 管理：放牧地の近くの農家（水やり・牛の観察・電気牧柵のチェック等）



勇ましく雑草に飛び込んでいく和牛たち

ご参加ください

毎年恒例！「家畜に親しむつどい」 ～施設一般公開～

当センターでは、家畜や畜産技術・研究の内容を広く一般に公開し、畜産に対する理解を深めていただくため、毎年、生産者団体との共催で「家畜に親しむつどい」を開催しています。

また、第2会場の家畜集合センターでは、「乳牛共進会」や「ミルクメッセinかながわ」も開催されますのでふるってご参加ください。

- 日時 平成18年10月22日（日）10時～15時
- 場所 畜産技術センター（第2会場は家畜集合センター）
- 内容 家畜と遊ぼう（子牛・子豚・ヒヨコ・ポニー等）
畜産研究成果等展示 農畜産物の販売 豚汁試食
堆肥無料配布 クイズラリー 蜜蜂展示
たまご料理教室 フワフワ（トランポリン）など
- 対象 参加自由（ペットをつれての入場はできません）



豚受精卵移植のための新型注入器を開発しました！

豚の受精卵移植技術は改良増殖を進めるための手法のひとつですが、これまでは、開腹手術を施して外科的に子宮内に移植する方法が主流で、農家段階への普及が難しいため、非外科的に移植できる方法が望まれていました。



新型注入器

これまでの、市販人工授精用注入器を応用した移植試験では、受胎率は人工授精の80%に対して40～60%、産子数は人工授精の10～11頭に対して4～5頭と、十分な成績が得られませんでした。

そこで当センターでは、独立行政法人農業生物資源研究所、ミサワ医科工業株式会社、独立行政法人家畜改良センター、埼玉県および愛知県と共同研究を進め、非外科的に移植が可能な「豚用子宮内注入器」の開発に取り組んできました。

今回開発した非外科的注入器（写真右上）は、受精卵を移植（注入）するための内管と、内管を子宮内へ誘導するための外管の二重構造としたため、容易に子宮深部（子宮角）に受精卵を注入することが可能となりました。この新型注入器により、高い受胎率（5頭移植して4頭受胎）が得られ、平成18年7月には人工授精と同等の子豚10頭が産まれたことから産子数の増加も期待されます（写真左下）。

さらに、この注入器は受精卵の移植だけでなく、人工授精における精液や、繁殖障害の治療における薬液等の子宮深部への注入にも利用でき、豚の繁殖成績を向上させるために大いに効果を発揮するものと考えています。

今後は、農家の庭先での非外科的移植による豚の受精卵移植を積極的に実施し、農家経営の安定に寄与していきたいと考えています。



受精卵注入の作業

イベント報告

企画経営部

身近に感じられたかな？浄化槽と微生物（おもしろ科学教室で）



当センターでは、「かながわサイエンスサマー」事業の一環として、毎年夏休み期間中、小学生を対象に畜産の知識について学ぶ「おもしろ科学教室」を開催しています。

今年は8月23日に、高学年を対象に「尿をきれいにする微生物のふしぎ」と題して企画したところ、20名の参加がありましたので、そのようすをお伝えします。

今回は、牛や豚にふれあいながら尿をきれいにしてくれる浄化槽の活性汚泥の働きを学習することで、私たちの食生活や、自然界の物質循環になくてはならない微生物について学んでもらいました。

当日はまず、身近な生活で役に立つ微生物や浄化槽のしくみについての説明のあと、牛や豚に触れ、えさやふん尿の量の多さに驚き、実際の浄化槽のそばで活性汚泥の正体であるいろいろな微生物を顕微鏡を見ながらスケッチ（写真左上）したり、浄化の度合いを色で判定するパケットにもトライしました。また、畜産農家の浄化槽巡回でも使用している「透視度計」を、ペットボトルを利用して工作し、それを使って実際の浄化槽処理水の透視度を測ってみて、微生物が水をきれいにする力にびっくりしていました。

（写真右下：透視度は30cm以上あり職員はホッとしました）

子供たちへのアンケートで、微生物の勉強以外に印象が強かったのは「牛にえさをあげたこと」という回答が多く、家畜とのふれあいを通じて、畜産への理解を深めてもらうよい機会になりました。

